

薄かれ、色のつくものだ。一方舟山では洪武錢通行といふことで彼地の人々に記録されると同時に、日本でその錢が薩摩の土産と出てゐる。一葦帶水の目支の關係の密接せる凡そ如斯しで

ある。これは獨り有史以後の文字あつてからの關係ではない、太古恐らくはかうした航路から西九州は夙に文化に趣いたものと考へられるであらう。

日本輸出陶磁器の動向 (一)

杉 山 精 一

一、緒 言

二、輸出陶磁器の世界市場に於ける地位

三、輸出陶磁器の地域的變遷

四、陶磁器輸出組合の現狀

六、北米部

八、南洋部

十、比律賓部

十二、馬來部

十四、近東埃及部

十六、中南米部

十八、結 論

五、陶磁器輸出港

七、英印波斯部

九、濠洲部

十一、佛印部

十三、滿洲支那部

十五、阿弗利加部

十七、歐洲部

一、緒 言

日本の工業發展は原料資源の獲得と同時に製品販路擴大が相伴つて、是が日本對外貿易の全動向を支配する最大要素で、國內を見るに原料資源に乏しく、國內市場は狹隘なる故緊急問題は新市場を外國に開拓する事である。近時我國の商品は廉價を以て先進國に挑戦をなし、全世界の市場を席捲せんとし、販路を勢ひ比較的未開地に求めんとするは、當然の動向で、その結果

各市場で各國と抗爭となつて日本品に對する障害關稅を設定せるが、何等効を奏せず續々侵入殺到し、最初に印度南洋等を征服し、次いで地中海沿岸に進出し、長驅遂に英本國、和蘭、致須、其他工業國を押へ、一方北南米へと蠶食し、他國品に追隨を許さず、日本商品全盛の凱歌を擧げてゐる。

輸出品の内純國產品は陶磁器のみで他に見出されない。一塊の土石はよく數千金を得るに容易であり、日本人の手先の器用な先天的技術を用ひて益々品質を向上さす時は世界市場に廉價でなく優良品で覇を稱へるは近き將來にあると信ずる。

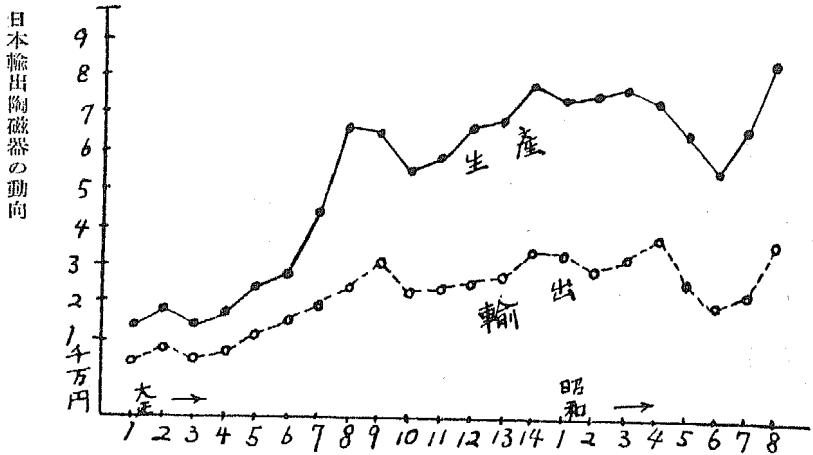
二、輸出陶磁器の世界市場に放ける地位

本邦陶磁器が外國産に較べて、實用性が豊富であり、大量供給が出来るのが優れた特色であつて、輸出品の八割を生産する名古屋地方の飲食器が世界の各市場を獨占し、建築タイル、衛生陶磁器、及上流向飲食器等は歐米品と競争の

初期である。明治初期よりの陶磁器生産及輸出を見るに

年次	輸出高(A)	生産高(B)	A/B%
明治元年	1,100,000圓		
同 五年	450,000		
同 十年	1,100,000		
十五年	1,600,000		
二十年	1,300,000		
二十五年	1,400,000		
三十年	1,800,000		
三十五年	2,000,000		
四十年	2,500,000		
大正元年	2,500,000	3,000,000	83%
五年	2,100,000	2,500,000	84%
六年	2,400,000	2,800,000	86%
九年	2,200,000	2,600,000	85%
十年	2,100,000	2,500,000	84%
昭利元年	2,000,000	2,400,000	83%
二年	1,800,000	2,200,000	82%
三年	1,700,000	2,100,000	81%
四年	1,600,000	2,000,000	80%
五年	1,500,000	1,900,000	79%
六年	1,400,000	1,800,000	78%
七年	1,300,000	1,700,000	76%
八年	1,200,000	1,600,000	75%
七年	1,100,000	1,500,000	73%

第一圖



大正元年には五百四十五萬圓の輸出となり明治二十年に比し四倍の増加、大正五年に一躍一千二百十萬圓となり大戰後は更に輸出に拍車をかけ大正九年には三千四百四十五萬圓で生産の半分を、然るに同十年には二千七十九萬圓と落ち其後逐年と恢復し、昭和年代の初に三千萬圓以上に及びしも昭和六年は一千九百五十九萬圓の轉落を示し、遂に陶磁器製造販賣統制が實施されて漸く増進し、昭和八年には三千六百二十萬圓に躍り、昭和九年には四千八百十七萬圓に大飛躍をなしてレコードをつくり、益發展の傾向顯著である。

海外の主要市場に於ける他國との競争狀況は

輸出 競争國	主要市場					
	米國	加奈陀	印度	獨逸	濠洲	南阿聯
日本	二五、七三〇	八、五八〇	一、七六〇	五、九〇〇	七、五〇〇	三三、三〇〇
英國	七、六〇〇	五、五四〇	一、四三〇	〇	五、一八〇	一、六三三
獨逸	三、七四〇	四、八〇〇	二、七四〇	〇	四、四〇〇	九、二七〇
致須	一、〇五〇	五、五〇〇	五、八〇〇	二、二〇〇	三、七〇〇	五、二〇〇

(一九三〇年)

米國市場に於ては日本は常に獨逸、致須と競争状態にあつて第一位を占め、千五百二十七萬圓で全輸出高の約四割に當り、印度市場は百七十七萬圓で英國を凌ぎ第一位を確保し、カナダ市場は第二位を占むるが第一位の英國とは大なる開きがあり、濠洲市場は英國に次ぎ第二位である。

以上の如く日本品の躍進は海運の國際的活躍と爲替金融の進出と相伴つて品質向上、更に各國民の趣味嗜好の適應性の増進、加之に世界經濟界に於ける日本の實力が増大した結果である。本邦商品の強味は第一に生産地の名古屋地方（愛知、岐阜、三重縣）が製造上に關して物質的諸條件が完備してゐるのと、數百年來の傳統的卓越せる技術の賜等であつて、他の先進國でも之に打ち勝つ事が出来ない。

第二に販路開拓市場が近くに在るといふ地理的關係の影響が甚大である。歐米諸國の輸出の八割に當る市場は日本の周圍の市場であつて、日本は歐米に比べて運賃低下、彼我民族の實生

活に適する商品を與へるに甚だ便利な地位にある。之に反して日本商品の弱味は近頃開拓せし周圍の市場は歐米先進國が三百年以前から投資や交易で開きし處で、政治上、經濟上に皆其勢力配下に置かれ、資本家擁護のため、障害や、壓迫を加へられてゐるは當然の道行で販賣上甚だ困却の地位にあり、又近頃迄日本品を取引する立派な機關がなく唯支那人、印度人、ユダヤ人等に採算次第で取扱はれてゐたが近時此等の國民も自國經濟政策に支配され、取引の原則を無視し、往々日本品取扱を拒絶する傾向がある、即商品の取引實權を今迄他國人に奪はれて居た事が最大弱點であつた。

三、輸出陶磁器の地域的變遷

驚異的發達を遂げた輸出陶磁器の經路は他の輸出品と同様であると考られ、之を、（イ）地場賣時代（ロ）居留地賣込時代（ハ）新市場直接開拓時代（ニ）異變時代 に別ける。

（イ）地場賣時代

徳川二百六十年の封建社會が破壊され、明治

維新後は資本主義に一變し、明治十九年紙幣整理完了まで工業として見るべきものなく其後でも農本主義で工場の機械化は望まれず従つて他國より原料を購入し、製品も粗工的加工原料に過ぎざる状態であつた。明治二一六年迄平均輸出一千六百八十一萬圓輸入二千六百十四萬圓となり明治二二―二六迄は輸出七千七百六十三萬圓輸入七千五百二十八萬圓となり入超をつゞけ輸入では同一六―二〇年は歐洲五七%米國九%支那二〇%印度九%で輸出は歐洲三二%米國三八%支那三%印度一%である。

此時代は主として歐洲とのみの貿易といつても過言でなく、米國、印度等の貿易は僅少であつた、即日本として工業原料を輸入し、國內産業の充實に努力した準備時代即對歐時代であつた、陶磁器の輸出に於ても前表の如く明治十年に十二萬圓、明治二十年に百三十一萬圓、同二十五年に百四十八萬圓の漸増の傾向である。

(ロ)居留地賣込時代

日清戦争後の貿易は増進し、明治三二―三六年平均額は五億四千萬圓で戦前の明治二二―二六年迄の三、七倍、明治六一―一〇年迄の十八倍になつた。これは戦勝によつて我國信用程度の増大は勿論、金本位制定(三十年)關稅自主權の獲得(三十二年)、航海法獎勵制定等政府の政策宜ろしき結果で歐米貿易は漸く對米、對印貿易へと轉向して輸出は歐洲二八%米國三三%印度三三%となつたが輸入は歐洲四八%米國一一%印度一五%で米國よりの輸入は未だ僅少で當時米國は工業が發達してゐない、陶磁器の輸出は明治三十年には百八十一萬九千圓、同三十五年には二百四十六萬圓となつて戦前(明治二十五年)に比べて十年間に二、七倍の増加を示した。日露戦役後は國內工業漸く機械化し製造小工場は合同され、大工場の傾向を帶び、原料輸入も増大し、輸出農作品は工業品と一變し、新市場を對米及印度方面に開拓して急激な發達を示

し、明治四十二—大正二年の輸出は五億一千萬圓以上に及び明治二—六年に比して二十五倍の増大で歐洲三二%米國三二%印度四〇%に躍進し、特に印度との貿易發展は目立つて來た。

陶磁器輸出は明治四十年には七百二十一萬圓で同四十二年には五百五十萬圓に落ち大正四年には六百九十五萬圓に増し、明治二十年（地場賣時代）の五倍の増進を見た、開拓市場は次の通りである。

年次	支那	香港	英領印度	蘭領印度	米國	カナダ	濠洲	海峽植民
大正四年	千圓 二、〇二二	六、五〇	三、五八	四、九七	四、五〇	一、六〇	一、五	七二

米國は第一の顧客であり、特に支那南洋印度方面の増進が著しい。

(ハ)新市場直接開拓時代

歐洲大戰中交戦國より軍需品其他の注文殺到と米國向の輸出好調、支那内亂で銀の高値、南洋方面へ歐洲品の代用としての活躍に依り、工業界へ拍車をかけ未曾有の輸出を遂げた、即大

正三—七年迄平均二十二億圓、大正八—十二年は三十八億圓に迫らんとし、輸出先は米國が三、三割より四、四割で首位を占め、之に反して歐洲は一、五割より〇、九割に激減した、陶磁器の輸出先は

年次	支那	米國	英領印度	蘭領印度	濠洲	加奈陀	總計
大正六年	千圓 一、九八〇	四、九五四	一、五九一	一、三三	九五二	五〇	一四、四三
大正八年	二、八五四	六、〇五五	二、三六一	一、七九七	一、四六六	七〇	三、六元
大正十年	一、六二四	六、八二六	一、六〇六	三、三八	一、四七七	一、〇九	一、三三〇

この時代に米、蘭領印度、英領印度、濠洲等の分散的市場の擴大は日本貿易の質約轉換を示すもので將來の發展性に多大の希望を抱くものである。

(ニ)異變時代

世界各國は大正末期になつて恐慌時代所謂不景氣となり國內産業の救済と既得販路擴大確保に新市場開拓を痛感し、自給自足の鎖國主義となり、自由通商は障壁を設けて他國品の侵入を

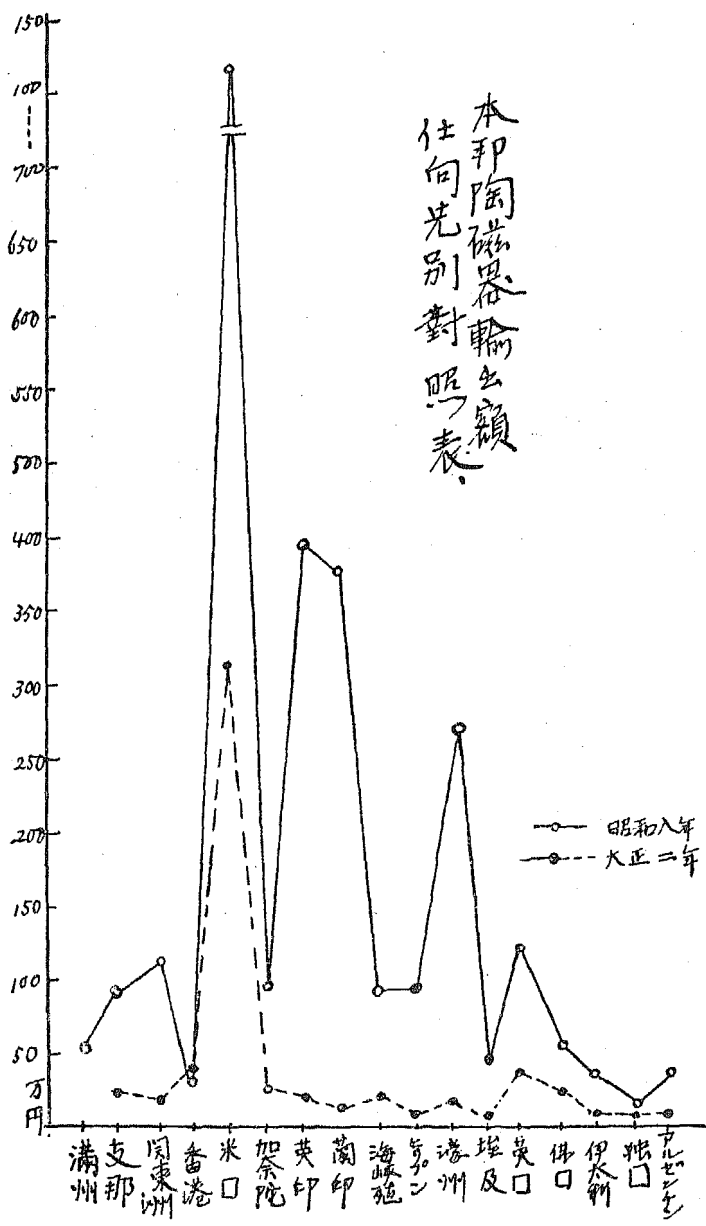
防止し、自國商品販路のみの攻防策を採用した爲日本品の良品廉價のみでは輸出困難となつた。上海及滿洲事變と成り、滿洲國獨立となつて對滿輸出激増したが、その反面に激烈なる排日運動全土に擴り、本邦商品輸出激減し、多年の市場の大半を失つた。又國內に於ては戰後激増した陶磁器工業は手工業より機械工業に變り生産は増大したもの、比較的小資本の經營なれば一度不景氣に襲はれると販路を失ひ困却甚しく生産と消費の不公平のため極端な自由競争となつて疲勞の底に沈み、品質は低下し日本商品の名を汚するに至つた、そこで品質向上、市場價格維持のため、昭和六年八月、陶磁器製造販賣統制を行ひ、同十二月金輸出禁止と圓價低落のため、印度、南洋、濠洲、歐米其他へ再び飛躍進出し、歐米諸國の當業者をして恐怖せしめ、「ダンピング」の名を以て各市場で極端な排撃を受け、日印會商日蘭會商を開く運命になつた。要する此時代の陶磁器の輸出は變化が著しく

昭和四年に三千七百六十八萬圓（生産の四割七分）の黃金時代より昭和五年には二千八百十九萬圓昭和六年には一千九百五十九萬圓（生産の三割六分）と次第に不振を呈し遂に統制實施され、昭和八年には三千六百二十萬圓（生産の三割二分）と漸増を示し、昭和九年には大飛躍をなし、四千百八十七萬圓を輸出し、數量四十五萬噸を出し、本邦輸出陶磁器以來の最高記録を印し、米國は總輸出額の約三割で第一位、英領印度及び蘭領印度の〇・七割、濠洲の〇・五割の順位であつて滿洲國は前年度（八年）の一・五倍の激増躍進を示せり。

四、陶磁器輸出組合の現状

本邦品の海外輸出盛なるに従ひ、輸出商の無統制は同志打となつて當然受くべき利得の喪失信用聲價の失墜を來し、甚だ遺憾と思はれてゐる際、海外にては輸入防遏策に惱まれ、統制の必要を痛感し、愛知、岐阜、三重の縣下を地區として昭和八年一月名古屋陶磁器輸出組合を設

本邦陶磁器輸出額
仕向先別對照表



第二圖

立し、同四月より輸出數量統制を實施したが同地は八割以上に及ぶが尙京濱、阪神地方の輸出統制の必要を感じ、同八月神戸陶磁器輸出組合大阪陶磁器輸出組合、東日本(横濱)陶磁器輸出組合を組織し、同九年に大日本陶磁器輸出組合聯合會を設置し、全國的に輸出數量及價格の統制をした、其後昭和九年九月十五日統制強化の目的を以て輸出組合法第九條(大正十四年三月三十一日發布)に基き商工省の統制命令が發布され、非組合員と云へども制限及取締法に従はねばならない事になり他品種に先驅して遂に統制完璧を完了した。

現在組合員は左の通りである。

組合員	地區
大日本陶磁器輸出組合聯合會	六三四名 日本全部
名古屋陶磁器輸出組合	一九九 中部日本
神戸陶磁器輸出組合	三〇〇 兵庫以西、中國、四國、九州

日本輸出陶磁器の動向

大阪陶磁器輸出組合 八一 近畿北陸
東日本陶磁器輸出組合 五四 静岡以東北海道迄

(組合聯合事務所は名古屋市東區白壁町にあり)
實施せる統制品種及統制地區は(第三、四圖參照)

(部別) (統制地區) (統制品種)

①北米部	米國、加奈陀、布哇	食器臺所用品
②印度部	英領印度、彼斯等	裝飾品、玩具
③南洋部	蘭領東印度諸島	食器臺所用品
④比律賓部	比律賓	裝飾品
⑤馬來部	海峽殖民地等	同
⑥佛印部	佛領印度支那及暹羅	同
⑦歐洲部	歐洲諸國(バルカンを除く)	同
⑧濠洲部	濠洲、新西蘭	同
⑨阿弗利加部	アフリカ	同
⑩近東埃及部	近東諸國及埃及	同
⑪滿洲部	滿洲國、關東洲	食器臺所用品、裝飾品、硬質タイル

第四圖



統制品目

花瓶
花入
乳入
水入
砂糖入
花瓶
中丸茶碗
ムシ茶碗

土瓶
コーヒ茶碗
肉皿
コーヒ碗皿
スープレ
井
奈良茶碗
サシミ皿

煙草セット
向付
汁洗
盃
徳利
碇子
ソケット
ノック
モザイク
張付
小口
クイル

井葉子皿
香台
高井
神器
佛器
満食器
印度煎茶
湯香

昭和九年度所屬組合の仕向先割當數量基定基準數量表を示すと次の如し。

仕向地方	名古屋陶磁器輸出組合		神戸陶磁器輸出組合		東日本陶磁器輸出組合		大阪陶磁器輸出組合		大日本陶磁器輸出聯合會	
	磁器輸出	噸	磁器輸出	噸	磁器輸出	噸	磁器輸出	噸	磁器輸出	噸
北米	一四八、五七四	噸	二六、三三三	噸	四、三三三	噸	三六	噸	二六、五五四	噸
英印	二、九五〇	噸	一七、三三三	噸	一九七	噸	二一、四二二	噸	四、一九七	噸
南洋	五三、八九〇	噸	一四、六五五	噸	二九	噸	二二、〇六六	噸	八〇、七〇〇	噸
歐洲	一四、七七七	噸	三、九四八	噸	二、八三二	噸	一〇五	噸	四〇、七七一	噸
濠洲	一八、一三三	噸	三、三三二	噸	一、九四四	噸	三三	噸	三、七九三	噸
滿洲支那	三三、〇〇五	噸	二、六六八	噸	二九	噸	六九二	噸	三、六六三	噸
阿弗利加	一三、一七九	噸	九、〇四四	噸	四二	噸	八〇六	噸	三、五〇〇	噸
中南米	四、四九七	噸	一、三九二	噸	四三	噸	二	噸	六、三三二	噸
近東埃及	一、八七一	噸	六四九	噸	六	噸	三六	噸	二、六六七	噸
合計	三〇〇、九五五	噸	八七、二九	噸	一〇、四四五	噸	三三、一〇七	噸	四〇〇、八六六	噸

割當は名古屋陶磁器輸出組合が七割、神戸同組合が二割、残り一割が大阪及東日本同組合となつてゐて、仕向先は北米が四割を占め第一位に、南洋の一割一分、英印、歐洲の約一割の順

位である。新規割當に於ては米國の五十噸に對し、蘭印の三十噸他は何れも二十噸以下であり、超過可能數量は新規割當の二倍で合計輸出可能數量は新規割當の三倍で米國の百五十噸蘭印の九十噸他の國は六十噸以下である。(未完)

新著紹介

○大日本讀史地圖

富山房發行 芦田伊人修補 特價五圓五十錢

富山房には吉田東伍博士の本圖帖があつた、昭和六年吉田博士に學ばれた芦田氏がその増補を快諾されて數年遂に八十有二版の本圖帖が完成した、この内舊圖を存する僅に十八面他は悉く新作でなくんば大に修訂を加へられたものである。

日本古地圖四種いづれも面白いのをコロタイプにした外に各時代の讀史圖ができた、第一圖の魏使來航道程推定圖は、耶馬臺を、筑前山門郡に置いてあるが、これでは魏書の道里に一致しないと思ふが、其他の圖版いづれも校訂緻密、我等はこれによつて讀史上發明する所の多いの喜び、著者多年の蘊蓄を傾けられた努力に絶大の賛辭を呈したい、印刷も體裁も美はしい、近來の地圖界への寄與であることを信じ江湖に